

筆致は粗くとも意味は緻密になる。

能樂によつて悟れ

能樂もまた吾人に教を惜まぬ。一本の扇子、それはさゝ事の時
に、瓶子ともなり盃ともなる。疊んで手を添えて傾ければ、そ
れは酒をつぐといふ意味になる。開いて受け、これを口にして
仰げば、酒を飲んだことになる。そこに實際の瓶子盃などなく
も、充分觀者をして會得せしむるに足りる。

繪もこれによいのであるまいか、寫實必ずしも上乘の繪では
ない、タトへ其物を明らかに現はさぬとも、それらしく思はし
て、少しも不自然の思ひを觀者に與へなければよいので、語り、
綜合上の美が、些細なる點の、不自然や欠點を掩ふて仕舞へば
よいのであらう。

各その長を採れ

我等は義太夫を聽いて、個性の研究の忽せにしてはならぬこと
を學び、人形使ひを見て、筆先の技術の無用なることを知り、
能樂によつて、感情さへ現はれたなら、物の細微な描寫の不必
要なことを悟つた。併し、寫實に重きを置過ぎるなら、恐らく
義太夫其ものゝやうに、餘韻なきものとならう。堂々と態度
のみ立派でも、微細な觀察が欠けてゐたら、無意味なものにな
らう。感情さへ現はせばと、あまりに大タイに過ぎては、不得
要領のものにならう。能の場合に於ても、盃とか瓶子とか、重
要ならざるものであればこそ、扇子で濟みもすれ、主要な人物
は、やはりそれ相應の面も用ひ、衣裳も着けてゐるのである。



△一代に秀た畫家は、青年畫家に、己れの得た經驗を傳へるこ
とを吝んではならん、時によつては、己の作も貸與へて摸寫を
させる位の事も、してやらねばならん。出來得る文學生の誤謬
を正し、可成上達する様に導くのは、先達の義務である。技藝
が繼續させる丈の價值のあるものたる以上は、我々が、我々の
先進者から得た經驗を、後進に傳へねばならん。

△若い畫かき連が、よく自分の許へ製作を持つて來るが、自分
は、義務と思つて、いつも製作を見てやり、又た借りたいと云
ふ畫、刷物などある場合には、努めて貸てやる。又た批評と勸
告は、正直思ふ通りを云つてやるが、之は時によつては、決して
愉快な話でない、時には胸の悪くなる様な惡作を持つて來る。

一體畫かきにとつては、惡作を見ると云ふ事は甚だ危險な事であつて、
自分も惡作を見てはならぬと云ふ事は、能く承知してゐる、
又た實際其惡處が身に傳染うつる様な心持がして、實に劍呑
へ置いて、してやらねばならん。之は我々の義務であるし、
又た世間もこれしきの事は、我々のすべき義務と思ふて居る。
我々は我々が先人から受けたと同様、矢張彼等にもせねばなら
ん。(岩村氏譯、ノースコート畫談の一節)

*

*

*

*

*

*